サブスクリプションで高度な本づくり

アイワード

きちんとした印刷物を

（株）アイワード（奥山敏康社長，札幌市，1965年創業）は，出版物に強い印刷会社として定評あるが，一時は，倒産寸前のところまでいったことがある企業だ。1970年過ぎ，オイルショックにより経営危機が表面化し，74年に現在の木野口功相談役が再建に乗り出した。「きちんとした印刷物ができないと，再建できない！」。

同社はハイデルベルグ社と付き合いが深いが，この年の4月にハイデルベルグの単色機を導入し，これが同社との取引の始まりであり，かつそこから再建の道がスタートした。その後，2色機，両面の4色機と枚葉オフセット印刷機の設備は増え，本づくり（本の製造）に邁進した。

その後，別な印刷会社の再建を支援して，1993年に「アイワード」の社名になる。そして「ハイデルベルグ社と経営課題を解決していきました」（奥山社長）。

石狩工場稼働

1990年後のDTP化の流れと同時に，同社は文字情報処理や自動組版とも呼べるシステム構築を推進していったようだ。その仕組みは，現在でも出版社の厚い信頼を勝ち取っている。

1998年に5000坪の石狩工場が竣工した。2000年にCTP，2003年に巻取紙からの枚葉紙製造装置と呼べるハイデルベルグ社のロールtoシーター「カットスター」付きの菊全判8色両

現場は，18,000回転で通常の仕事はこなしている。サブスクリプション契約をした反転機構付き「スピードマスターXL106-4P」

面兼用印刷機を導入。設備投資がその後も進んだ。それは，「プリプレスからポストプレスまでのデジタル生産を目指そう」（奥山社長）という流れになった。

作業環境をクリーンにする意識もあり，省力化と環境対応は，顧客へのアピールにもつながっていった。

奥山敏康社長（左）。枚葉印刷部門全員が課題を共有し取り組んでいることが良かったと話す大沢眞津子副社長（右）

ブックプリンティング専業へ

2000 年からはフルデジタルのワークフローが進み，また「ブックプリンティング」専業で他社に負けない仕組み作りとして事業が進んだ。2016 年には，Word 文書からの自動組版技術による刊行物制作を本格的に始める。

そして 2022 年 3 月，ハイデルベルグ社の 4 色両面兼用オフセット印刷機「スピードマスター XL106-4P」を導入し，その印刷機に対し，ハイデルベルグ・ジャパンとサブスクリプション契約をした。「用紙，資材の値上げ，地政学的な世界情勢などがあるこの年にふさわしい導入を決断できました」（奥山社長）。

一番の魅力は 60 回のコンサル

「ハイデルベルグ・サブスクリプション」導入の一番の魅力は，「60 回のコンサルタントを受けられること」と奥山社長は話す。「毎日，降りてくる版を印刷機に取り付けて印刷しているというこのやり方を本当に続けていいのかと考えてしまいます。このやり方自体を変えていかないと当社は成り立たなくなるのではないかと考えました。危機感を抱いています。」

（印刷会社は）お客様が作った原稿を加工していく事業形態だが，本当にこれでいいのかと思考した。そのためもあり，ハイデルベルグと，「その枠を超えた，ビジネスモデルの改革，お客様からいただいた加工業務だけにならない改革」（奥山社長）を進めることが，サブスクリプション導入の目的でもあるし，決意でもあるとのことだ。

高品質な本づくりを指向するアイワードは 2022 年，ミューラーマルティニ社（スイス）のブックブロックフィーダー付き PUR・ホットメルト製本システム「アレグロ」30 鞍と「ボレロ」21 鞍を導入し本格稼働を始めている（写真提供：アイワード）

日本で 4 社目

なお，ハイデルベルグ社のサブスクリプションは日本では 4 社目。同社のサブスクリプションの特長はエンド to エンドであり，「Push to Stop」で推進されることだといい，Push to Stop のシステムをアイワードはすでに導入している。タッチポイントを減らした自動運転推進や，生産性を大幅に向上する取り組みのため，3000 個のセンサーが印刷機を監視している。印刷機と印刷機の扱いの潜在能力を最大限まで追求し，OEE（総合設備効率）を向上させるとのことだ。

サブスクリプション契約は 5 年間。含まれるサービスは，印刷機とその保守サービス，印刷資材の供給と印刷資材管理システム，VMI（Vendor Managed Inventory，在庫管理），Prinect（ソフト），（5 年 ×12 ヵ月の）コンサルティング＆

トレーニングなど。①月額料金で最新の印刷機を利用，②現状分析とターゲット設定，③生産現場での継続的な支援，④印刷会社と成果を共有などが特長だ。それは，効率化や競争力強化，そして働き方改革にもつながる。

熱い思い

5年間，計60回のコンサルタントにより「PDCAのらせん階段を上るように会社を向上させていきます」（奥山社長）。仕事のやり方を見直し，枚葉印刷物を中心に会社全体の潜在能力を高めようとしている。それは印刷の前工程も後工程も作業の削減につながる。

今回のサブスクリプションの対応印刷機は，菊全判8色両面兼用機と同4色両面兼用機の2台を出して1台にする入れ替え。胴数は，12胴から4胴に激減した。それでも，OEE向上により従来以上の仕事量を目指す。

また奥山社長は話す。「まだまだ個人の裁量があります。だれ彼がやったらうまくいくなどです。誰がやっても，きちっとした仕事ができるよう，組織的にやるべきなのです。そのため，組織的に議論し，数字で判断できるように意識改革が必要です。現場は，2台減った分の成果を上げようと，みんなで力を合わせるというのが，一番の変化であり，良かったことです。」

細かな点では，まずは色の変動要因を減らすことという。そこを仕組みで改革するためにも，サブスクリプションに魅力を感じたようだ。色に特化した標準書を独自に策定したともいう。

サブスクリプション契約に含まれる印刷資材管理システム，VMI。スマートフォンとQRコードを使うことで，面倒な各種資材の在庫管理が自動的に行われ，必要な時に必要な分の資材が届く。たとえば写真のように「棚から出す」時や「残り10枚になったらスマホで撮影」などとして管理している

さらに「1ヵ月で課題をクリアできてきましたし，残業も減ってきました」（大沢眞津子副社長）。

まだ始めて3ヵ月だが，「顧客体験価値を見える化するのがこれからの課題」という。「ブックプリンティングにより当社といっしょにお客様が成功するという，当社とパートナー関係を結ぶことを目指します。」

「設備だけでない，これらがどう感じていただくか。その結果，お客様がお客様を呼ぶことになる。この好循環が良いことでしょう。“顧客体験価値が当社と顧客の間に見えてくる状態にする”，それこそがこれからの取り組み。その後押しをしてくれるのがハイデルベルグさんとの関係だと思っています。」（編集部）

なるほど「湿し水」
管理とトラブル対策
富士フイルム グローバルグラフィックシステムズ株式会社 編
印刷学会出版部
http://www.japanprinter.co.jp

A5判・130ページ
2,860円（税込）